

実践のまとめ（第2学年 国語科）

令和3年9月1日 第5校時
指導者 阿賀野市立水原中学校
教諭 阿部 伸彦

1 研究テーマ

自分の考えを他者の考えと交わせ、問い直し、更新していく学習の研究

2 研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

中教審答申2-2（平成28年）「各教科・科目等の見直し1国語」では、国語科における授業改善のために、「子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めること」といった、主体的・対話的で深い学びの実現を意識した視点の重要性が挙げられている。しかし、いざ自らの国語の授業を振り返ると、理解や表現を練り直す機会が少ない、目的感の乏しいコミュニケーション活動になりやすい、故に積極的に自分の考えを発表できないといった課題が挙げられる。

そこで、話し合い活動を通して、他者の意見に耳を傾け、自分の意見を語り、自他の考えを比べることで問い直し、自らの考えを深められるといった有益性を感じられるように話し合い活動を設定する。

(2) 研究テーマに迫るために

① 自分の考えを明確にする時間の確保

生徒一人一人が、個人の考えをもって話し合いに臨むために、書く時間すなわち個人で思考する場を確保する。また、学習に苦手意識がある生徒でも取り掛かりやすいシンプルな課題を設定する。

② 学習者間にズレが生まれるような学習課題の設定

仲間の考えとのズレを顕在化させ、交流する必要感をもたせる。また既存の知識や経験を想起させながら、共通点や相違点を明らかにして話し合えるようにする。

(3) 研究テーマに関わる評価

話し合い活動を経て、鑑賞における考えが深まったと感じたかどうかについてワークシートの鑑賞文の記述内容を評価する。（鑑賞文と、感想文の内容評価）

3 単元と指導計画

(1) 単元名

ことばを磨く「短歌」（現代の国語2 三省堂）

(2) 単元の目標

- ・短歌を読み、理解したことや考えたことを自らの知識や経験と結びつけ、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。（思考力・判断力・表現力等Cオ）
- ・単語の活用、助詞や助動詞などの働き、文の成分の順序や照応など文の構成について理解するとともに、話や文章の構成や展開について理解を深めることができる。（知識及び技能（1）オ）

- ・言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にしてい、思いや考えを伝え合おうとする。(学びに向かう力、人間性等)

(3) 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	短歌のリズムや表現方法などの特徴を理解している。 (1) オ	「読むこと」において、短歌を読み、理解したことや考えたことを知識や経験と結びつけ、自分の考えを広げたり深めたりしている。(Cオ)	進んで知識や経験と結びつけ、学習課題にそって考えたことを伝え合おうとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画 (全4時間、本時3次 1/2時間)

	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1次 (1)	・短歌がもつ魅力や面白味を感じる。	・教科書「短歌の世界」を読み、鑑賞体験する。	態 自分の考えを表現し、短歌の中に広がる世界を言語化している。【ノート】
2次 (1)	・短歌の基礎知識について理解する。	音の数え方と句切れ、表現技法について学習する。	知・技 短歌のリズムや表現技法を理解している。【ノート】
3次 (2)	・短歌を鑑賞し、短歌の中の世界を想像する。 ・短歌十首を読み深める。	抽出した短歌について鑑賞する。	思・判・表 短歌を読み味わったことを、広げたり深めたりしている。【ワークシート】

4 単元と生徒

(1) 単元について

短歌は、一語一語に作者の心情が凝縮されているとあってよい。作者が現実で体験したことを抽象概念とし、それを具体的な情景を使って表現したものである。それは、三十一音という限られた短詩型だからこそ、精選された言葉が並び、読み手に自由な想像を引き起こす。読者によっては個人既有的な経験と結びつくことで、心を動かし、物の見方や考え方を顕在化する。短歌の発展学習を通して、言葉に対する思いの深さにふれ、表現の工夫やその効果を学ぶ機会としたい。

(2) 生徒の実態

本校2学年生徒は、与えられた課題に対しては熱心に取り組む。しかし、創造性や独自性を求めるような課題になると、意欲や自信を失ってしまい、学習が停滞する傾向にある。そこで、本単元では作品における鑑賞活動の前段階として、マスキングされた虫食い部分に当てはまる語句を想像したり、二項対立になるような発問をしたりしながら短歌の中に広がる世界観について想像できるような活動を行い、意欲や自信をもって鑑賞に臨ませたい。

5 本時の展開

(1) ねらい

- ・短歌のリズムや表現方法などの特徴を理解して、作品の内容を捉える。
- ・情景や心情を表す語句に注意して、短歌の世界を読み味わう。

(2) 展開の構想

- ① 詩作品の一部を隠すことで、短歌の定型から、空欄に入る語句の音数は推測しやすくなり、文脈を読む思考を活性化させる。
- …言葉に注目することから、短歌の中に広がる世界観、すなわち作者の想いを読む。
- ② ホワイトボードを活用しながら、小集団で意見を出し合い、考えを広げさせる。
- …短歌の内容やリズムから空欄に入る言葉を考える活動を通して想像力を伸ばし、心情を豊かにすることをねらう。
- ③ 自他の意見を交わらせ、想像した短歌の世界について鑑賞文をまとめさせる。
- …授業の中で考えた自らの意見と話し合い活動の中で触れた級友の意見を交わすことによりよい鑑賞文を書くことにつなげ、また空欄に当てはまる作者が実際に考えた語句とその作品を鑑賞することで、作者の優れた言語感覚に触れる。

(3) 展開

時間 (分)	学習活動	教師の働きかけ (◎) 予想される生徒の反応 (●)	□評価 ○支援 ◇留意点
導入 (5)	・短歌の基礎知識を確認し、今日のめあてを確認する。	◎短歌と俳句の定型ってなんだったっけ？ ●「5・7・5」「5・7・5・7・7」	○ペアで質問しあい、既有知識を確認する。 ○電子黒板にパワーポイントを映し出す。
課題		空欄に入る言葉は何か、想像しよう。	
展開1 (10)	・短歌①を確認し、個人で考える。 ・学習班で考えを交流する (ホワイトボード)	◎空欄に入る言葉は、何だろうか？ ●身体の一部が入りそう。 ◎考えの理由を引き出す。	○定型の確認→読み方の確認→空欄の音数の確認 ○作者の経歴を紹介する。 ○短歌の奥に広がる世界を想像するよう助言する。 ◇文語表現の意味を補う。
展開2 (15)	・短歌②を確認し、個人で考える。 ・学習班で考えを交流する。(ホワイトボード) ・「停車場」は何処にあるか考えよう。 ・学習班で考えを交流する。	◎空欄以外は読めそう？ ●読み方は「こきょう?」「ていしゃじょう?」 ◎空欄に入る言葉は、何だろうか？ ◎「停車場」がある地名はズバリ、どこだろうか？ ●「出身地」、「上京先」かも。	○「停車場」の意味を字引させる。 ◇文語表現の意味を補う。 ○短歌が詠まれた状況を想起させる。 ○作者の経歴を確認する。
展開3 (15)	・短歌①と②について、鑑賞文を書く。	◎石川啄木の短歌を読んで、感じたこと考えたことを書いてみよう。	○鑑賞文の書き方の例を用意する。 □短歌を読み味わったことを、広げたり深めたりしている。【ワークシート】
まとめ (5)	・本時の学習内容を確認する。		◇次時に鑑賞文を発表、交流することを予告する。

(4) 評価

- ・短歌の一部を想像し補うことで、短歌に対する考えを深めている。(思考・判断・表現)

6 実践を振り返って

(1) 授業の実際

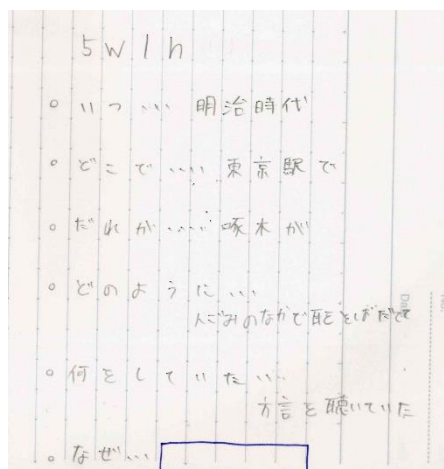
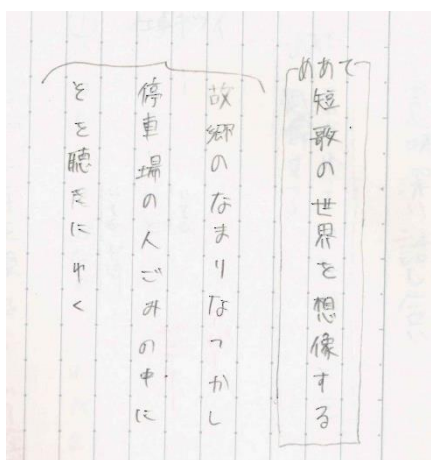
本時の導入では、まず本時で重要となる想像力という言葉をつきかけに、小学校の詩教材である、まど・みちお作の詩作品の一部を空所にして、生徒らに提示した。電子黒板にパワーポイントを映し出すことで、板書する時間を省きながら、詩の情景を視覚的に生徒へ伝えることができた。生徒らは空所補充を行い、意欲を喚起しながら詩の一部を考えることを通して作者の思いを考えた。そして、徐々に難易度をあげていき、本時の短歌を提示した。そこで短歌とは何かという問いを投げかけ、前時の既習事項である5・7・5・7・7という定型の基礎知識を確認した。

展開1で、生徒らは中心課題として設定した短歌①の空所補充を行った。考えるにあたり、短歌の定型をもとにして、音数を数えながら空所に入る言葉を探っていた。その後、学習班での対話活動や全体で考えを共有し、他の班の考えを想起したり、最初の自分の考えを変えたりしながら学習を進めた。この短歌を通して、石川啄木の作風や略歴を学び、展開2で短歌②の空所補充を行った。そして、短歌の一部である「停車場」の所在地は、「東京都」か「岩手県」かの二択を理由とともに考えた。最後に、二つの短歌を通して、読み取ったことを鑑賞文として書き、本時の感想をまとめた。

しかし、鑑賞文を書くための時間と、そのための交流活動の場を十分に確保できなかった

ため、鑑賞文や感想を書くことができない生徒が多数いた。それゆえに次時を、鑑賞文をかく時間として設定し直した。

(2) 研究テーマに関わって～書かれていない「なぜ」を問う～



次時で鑑賞文を書く前段として、本研究のテーマである他者との学びあいを設定し、作者の心情の問い直しを図り、学習の発展につなげた。

学習班で、前回読んだ短歌②の情報を5W1Hの図に事実や描写を整理していった。生徒の大半は、「いつ」「どこで」「誰が」「どのように」「何をしていた」の項目は、すぐに書くことができるけれど、「なぜ」の項目は描写されていないため、前回の授業の作者の心情を理解した子と、理解できなかった子で差が出来ていた。それゆえ、そこを論点にした話し合いを設定した。作者がなぜ故郷へ思いを巡らすのか、その時の作者の生活を取り巻く状況や環境に思いを馳せ、鑑賞文を作成した。

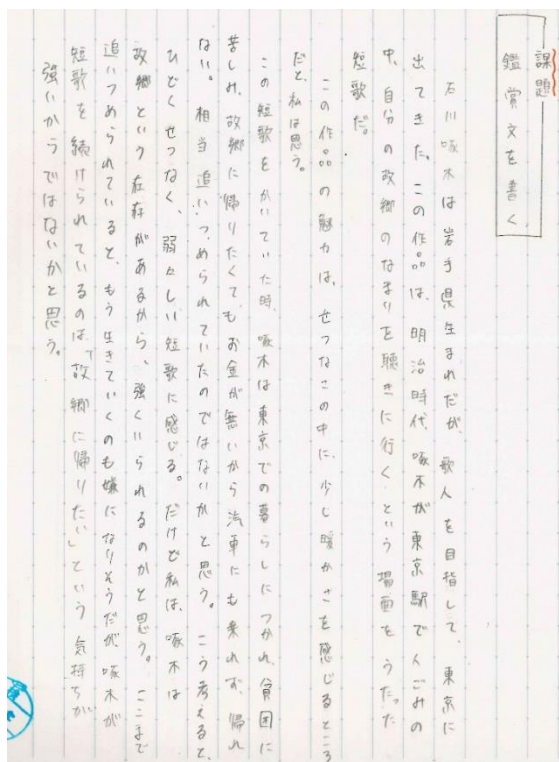


図 1

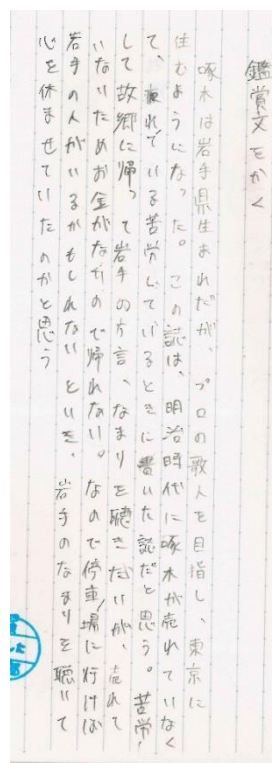


図 2

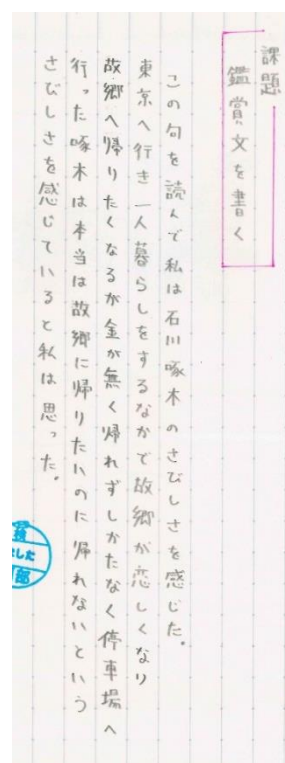


図 3

図1の鑑賞文の記述には、「せつなさの中に、少し暖かさを感じる」との記入があり、その理由を次のようにまとめている。「東京での暮らしにつかれ、貧困に苦しみ、故郷に帰りたくてもお金が無いから汽車にも乗れず帰れない。相当追いつめられていたのではないかと思う。こう考えると、ひどくせつなく、弱々しい短歌に感じる。だけど、私は、啄木は故郷という存在があるから、強くいられるのかと思う。」

「この詩は、明治時代に啄木が売れていなくて、疲れている、苦勞している時に書いた詩だと思う。」「岩手のなまりを聴いて、心を休ませていたのだと思う。」(図2)

「本当は故郷に帰りたいのに帰れないというさびしさを感じている」(図3)

ほぼすべての生徒が、作者・石川啄木の現実を感じる苦しみや故郷への羨望などといった三十一音には表現されていない心情を書くことが出来ていた。

それゆえに、定型詩教材における鑑賞文を書く上で、対話的活動を行い描写されていないことを考えることが有効であったと考える。

(3) 今後の課題

① 余白のある授業構成

余白とは、自分の考えを発展させる時間である。目の前の教材に正対して、自分の考えを深めたり、他者の考えを問い直したり、他者の考えを踏まえて自分の考えを更新したりする時間の重要性を、今回の授業実践を見つめ直して改めて実感した。

② 話し合い活動を全体共有につなぐ在り方

話し合いが進まないグループには、活発に話し合いを行うグループの議論の内容を共有させることで、学びを広げられるが、今回はうまくいかなかった。原因として、話し合いの一部をメモさせるなど可視化する道具を用いなかったことにあると考える。授業者が全体共有を図る上で、話し合い内容の可視化ができる手立てが必要である。